を上ること無慮四十二級、 く申し渡した、 に向って婆さんは媾和条件の第一款として命令的に左のごと べき顔面が苦し気に戸口にヌッと出現する、 を費す事三分五セコンドの後この偉大なる婆さんの得意なる げにかかると申すは手間のかかるを形容せんためなり、 の天辺まで運び上げにかかる、 の婆さんに降を乞うや否や、 西暦一千九百二年秋忘月忘日白旗を寝室の窓に翻えして下 きばかり也、 この会見の栄を肩身狭くも双肩に 途中にて休憩する事前 婆さんは二十貫目の体躯を三 運び上げるというべきを上 あたり近所は狭 後二 に荷える余 回 階段 時

自転車に御乗んなさい

うと 不肖なりといえども軽少ながら鼻下に髯を蓄えたる男子に女 うと云う、その理由いかにと尋ぬるに初学入門の捷 径はこれ び込みたる彼はまず女乗の手頃なる奴を撰んでこれがよかろ り前の奴でやってみようと抗議を申し込む、 に限るよと降参人と見てとっていやに軽蔑した文句を並べ 督兼教師は○○氏なり、悄然たる余を従えて自転車屋へと飛 ンダー 命に従って自転車に乗るべく否自転車より落るべく「ラヴェ あ 暗に下がに黙っている、 たら丈夫玉砕瓦全を恥ずとか何とか珍汾漢の気燄を吐こ あ悲いかなこの自転車事件たるや、余はついに婆さんの で稽古をしろとは情ない、 ヒル」へと参らざるべからざる不運に際会せり、 とそれならこれにしようと、 まあ落ちても善いから当 もし採用されな る、 監

> 涙 当人はしきりに乗り気になる、 自転車の末路また、憐むべきものありだがせめては降参の腹癒狐客に引きずり出され奔命に堪ずして悲鳴を上るに至っては かと、 の真中へ馳け出そうとする、乗らぬ内からかくのごとく処置 過敏にてこちらへ引けば股にぶつかり、 の隅に閑居静養を専らにした奴に違ない、計らざりき東洋の
>
> 「*** 万里の波濤を超えて遥々と逢いに来たようなものである、 して。惟れば関節が弛んで油気がなくなった老朽の自転 に窮するところをもって見れば乗った後の事は思いやるだに にこの老骨をギューと云わしてやらんものをと乗らぬ先 てみる、 転車屋には恩給年限がないのか知らんとちょっと不審を起し 力を出して上からウンと押して見るとギーと鳴る事なり、 いとも見苦しかりける男乗をぞあてがいける、 の種と知られける、 あてが ばず、どうせ落ちるのだから車の美醜などは構うもの 思うにその年限は疾ッくの昔に来ていて今まで物置 われたる車を重そうに引張り出す、不平 然るにハンドルなるもの神経 向へ押しやると往来 思えらく能者 なるは から

るに至った、ああ悲夫、 いう、いよいよ降参人の降参人たる本領を発揮せざるを得ざいう、いよいよ降参人の降参人ながらいろいろな条件を提出する、仁恵なる監督官は余が衷。情を 憐んで「クラパム・出する、仁恵なる監督官は余が衷。情を 憐んで「クラパム・出する、仁恵なる監督官は余が衷。情を 憐んで「クラパム・「どこへ行って乗ろう」「どこだって今日初めて乗るのだから「どこへ行って乗ろう」「どこだって今日初めて乗るのだから

乗って見たまえとはすでに知己の語にあらず、その昔本国

間際でずどんと落ること妙なり、自転車は逆立も何もせず至極 る 一 ずんでん堂とこける、 落ちつきはらったものだが乗客だけはまさに鞍壺にたまらず を示す一段になるとおあつらえ通りに参らない、いざという っぱれ武者ぶりたのもしかったがいよいよ鞍に 跨ばればしま ぼえは毛頭ない、 に至るまで人の にあって時めきし時代より天涯万里孤城落日資金窮乏の今日 言と怒髪鳥打帽を衝て猛然とハンドルを握ったまではあ 乗るのを見た事はあるが自分が乗って見 去るを乗って見たまえとはあまり無慈悲 かつて講釈師に聞た通りを目のあたり つて顧盻る

な

勇

しか、 いて砂 んとは実に神ならぬ身の誰か知るべき底の驚愕である。 てこれらの準備すべてこれらの労力が突き出される瞬間 すんだよ、と怖がる者を面白半分前へ突き出す、然るに たろう、今度はそーっと尻をかけて両手でここを握って、 く進んでさあ、 を嘆願する、 しないああ吾事休矣としきりに感投詞を繰り返して暗に 限りなし、 みついて車が一回転でもすれば上出来なんだ」、と心細いこと ている、ペダルに足をかけようとしても駄目だよ、ただしが 監督官云う、 僕が前へ押し出すからその。勢で調子に乗って馳け出 1横面 ああ吾事休矣いくらしがみついても車は半輪転も かくあらんとは兼て期したる監督官なれば 「初めから腰を据えようなどとい 田を 抛っ 僕がしっかり抑えているから乗りたまえ、 りつけるための準備にしてかつ労力 うの が間 k え、 打³お けずべ にお 助 違っ なら 勢 近

えて帰る、

く車嘶い

て白日暮れ耳鳴って秋気来るヘン

どうでしたと婆さんの問に敗余の意気をもらすら

すなわち乗れざる自転車と手を携

帰ろうじゃないかと云う、

あってまさに近づいたものと見える、その理由に曰くここは 天涯この好知己を得る以上は向、脛の二三カ所を擦りむいたってんがい。こうちき、むこうずね、むこうずね、転車と奮闘しつつある健気な様子に見とれているのだろう、 服 と監督官は降参人の今日の凹み加減充分とや思いけ なら往来へ出てやらしゃい、オーライ謹んで命を領すと混淆式 馬を乗る所で自転車に乗る所ではないから自転車を稽古する ト出のチンチクリンの田舎者に近づかざるべからざる理由が る、こちらはこんな人に近づきではないが先方ではこの てな滅多な異人に近づきはないはずだがとふり返ると、 る、すると出し抜に後ろから Sir!と呼んだものがある、 だよ」と降参人たる資格を忘れてしきりに汗気燄を吹いてい の答に博学の程度を見せてすぐさまこれを監督官に申出る、 く押してくれたまえ、なにまた落ちる? て惜しくはないという気になる、「もう一 に腰をかけてさっきからしきりに感服して見ている、 っと人を狼狽せしむるに足る的の大巡査がヌーッと立ってい しているのか分らない、 おおかた流汗淋漓大童となって自 落ちたって僕の身体遍頼むよ、もっと強 遍頼むよ、 何を感 ちょ もう ポ ッ は

自ら実行するとは、あにはからんや、

名士が自転車から落る稽古をすると聞いて英政府が特に土木 二丁余、 に眼を放って遥かあなたの下を見廻す、監督官の相図を忘月忘日の例の自転車を抱いて坂の上に控えたる余は て一気にこの坂を馳け下りん からず、 左右はゆかしく住みなせる屋敷ばかりなり、 傾斜の角度二十度ば かり、路幅十間を超えて人通多 との野心あれば 監督官の相図を待っ なり、 坂 東洋の の長さ 徐_も ろ

がある、

ちらほら人が立ちどまって見る、

向うの樫の木の下に乳母さんが小供をつれてロハ台

にやにや笑って行くもの

と車を天然自然ところがすべく特にこの地を相し导て余を車はまた余の車を前へ突き出す労力を省くためか、昨日から人所である、余が監督官は巡査の小言に胆を冷したものか乃至に判然しないが、とにかく自転車用道路として申分のない場局に命じてこの道路を作らしめたかどうだかその辺はいまだ

れだしたのである、

濫用してはおらぬかと危ぶむくらいなものである、されどもが初出に梯子乗を演ずるがごとく、吾ながら乗るという字を進するの義なり、去るほどにその格好たるやあたかも疝気持 かる、 だからと言って気取る訳にもどうする訳にも行かん、 列を整えて 向 からやってくる、 ものがある、 疾風 も人間が自転車に附着している也、 乗るはついに乗るなり、 意なり、 ざるなり、 あらざるなり、 用られていない 註釈が入る、 さあ今だ早く乗りたまえという、 の方の屋敷の内から拍手して吾が自転行を壮に ているなり、 人の通らない馬車の っている、 のごとくに坂 今度は大変な物に出 人をもよけず馬をも避けず水火をも辞せず驀地に前 ただ力学の原理に依頼 この意味において乗るべく命ぜられたる余は、 この字は吾ら両人の 妙だなと思う間もなく車はすでに坂の中腹 腰は曲っている、 鞍に尻をおろさざるなり、 去るほどにその格好たるやあたかも疝気持いのである。 わがいわゆる乗るは彼らのいわゆる乗る の上から か 乗らざるにあらざるなり、 よわない時機を見計ったる監督官 転がり出す、 つ た、 こうなってはいくら女の 右の足は空を蹴ている、 ただ 間には して毫も人工を弄せざる しかも一気呵成 女学生が五 にしこの すると不思議やな左 いまだ普通 ペダルに足をか 乗るとい したいたずら んばか とも の に附着 う字に 意 両 ij 手前 下 へか かく 味 は け の に

> ない、 骨が折れ 乗り上げそれでも止まらない 勢でむやみに人道 に立ている巡査の方へ向けてどん れども毫も留まる気色がない 自家独 事一間半、 の姿勢をくずす訳に行かない っと一息つく間 ようとしても車の方で聞かない、絶体絶命しようがないから 今日も巡査 得の まし 油乗の 危くも巡査を去る三尺の距離でとまった。 ょうと笑ながら査公が申された故、 ...もなく車はすでに坂を下りて平地 の方 |に叱られる事かと思いながらもやは ま ま で女軍 へ猛進する、 で板塀へぶつかって逆戻をする の んどん馳けて行く、気が気でしかのみならず向うの四ツ角 自転車は我に無理情死を逼る 傍をからくも とうとう車道から人道 り抜 答えて日か に にあり、 け 大分御 り曲 で 乗

イエス、

開く「・ 解せられたる意味をもって坂の上から坂の下まで辛うじて乗 ら擬せられた先生は実に普通 あ ます」「自転車は面白うござんすね、 車を始めたも 「夏目さんは大変御勉強だそうですね」と細君が傍から口を かなるものなるかをさえ解し得ざる男なり、 なたもやは あまり勉強もしませ のですから、 り遠乗をなさい λ 朝 の意味において乗るちょう事の ま から晩までそれば 近頃は人 しょう」 宅ではみんな乗りますよ、 へから勧撃 遠乗をもっ ただー か めら りやってい て細君か れて自転 種の

せんが、坂の上から下の方へ勢よく乗りおろす時なんかすこのごとく返答をした「さよう遠乗というほどの事もまだしまこの点にかけては一人前に通用する人物なれば、如才なく下掛道を云うことが第二の天性とまで進化せる二十世紀の今日、り終せる男なり、遠乗の二字を承って心安からず思いしが、り終ま

ぶる愉快ですね

今度の土曜ぐらいは御閑でいらっしゃいましょう」とだんだは面白いでしょうしかし……」「御勉強で御忙しいでしょうが ら、 咽喉を扼しつつある二寸五分のハイカラの手前もある事だか よ」とすぐ通せん坊をされる、 路を開くや否や「いえ、あの辺の道路は実に閑静なものです はエー……アノーまだ練れませんから」とようやく一方の活 かし」の納り場がなくなる、 だかまだ判然せざるうちにこう先を越されてはいよいよ「し 忙が来ると限っておらない、自分ながら何のための「しかし」 ては生 涯の不面目だし、かつやこれでもかこれでもかと余が しくも文明の教育を受けたる紳士が婦人に対する尊敬を失し の果し状を真平御免蒙ると握りつぶす訳には行かない、 るに至れり、 余ここにおいてか少々尻こそばゆき状態に陥るのやむをえざ に向って動議を提出する、父君と母上は一斉に余が顔を見る、 ウィンブルドンへでも行ったらどうでしょう」と父君と母上 ん切り込んでくる、余が「しかし……」の後には必ずしも多 今まで沈黙を守っておった令嬢はこいつ少しは乗きるなと | 違をしたものと見えて「いつか夏目さんといっしょに皆で ことさらに平気と愉快を等分に加味した顔をして「それ さりながら妙齢なる美人より申し込まれたるこ 「しかしあまり人通りの多い 進退これきわまるとは啻に自 い 所で や

かに、彼は余を目してサイクリストたるの資格なきものと認うしょう、そしていっしょに散歩でもしましょう、――サイクリストに向っていっしょに散歩でもしましょう、――サイクリストに向っていっしょに散歩でもしましょう、――サイとや見たりけん、審判官たる主人は仲裁乎として口を開いて日は天気でしょうか」旗幟の鮮明ならざること。夥しい誰に聞して「しかし」をもう一遍繰り返す「しかし……今度の土曜して「しかし」をもう一遍繰り返す「しかし……今度の土曜点したばかりでは埒があかないから、この際唯一の手段と転車の上のみにてはあらざりけり、と独りで感心をしている、転車の上のみにてはあらざりけり、と独りで感心をしている、

定せるなり

このうつくしき令嬢と「ウィンブルドン」に行かなかった

自転車の鞍とペダルとは何も世間体を繕うために漫然余は下の結論に到着した

官及びその友なる貴公子某伯爵と共に、鎌を連ねて「クラパムのながその友なる貴公子某伯爵と共に、鎌さは今例の監督一度びこれを握るときは人目を、眩せしむるに足る目勇力を放ったがいなり、ハンドルはもっとも危険の道具にして、ののでがいなり、ハンドルはもっとも危険の道具にして、いたができたができたがなが、ないは足を載せかつ踏みつけると回転するための鞍と附着しているものではない、鞍は尻をかけるための鞍とをがたのではない、鞍は尻をかけるための鞍とをがたのではない、鞍は尻をかけるための鞍とがその数との数ができます。

コンモン」を横ぎり鉄道馬車の通う大通りへ曲らんとすると

御免よとは、横ぎりに 逆゚な 艪゚い 老朽 事な る、 る、 ときか 場がきまってしまった、 やむなく 孝ならんと欲すれば礼ならず、 もったい と御両君 言とし が吾家伝 での態度 るに出られべき一方口が突然 塞 に自由 て衝突はこちらが勝つ場合についてのみあえてするが、 思い 負色の の用意 :悲鳴をあげるほどの吾が自転車との衝突は きわれつらつら思うよう、 さような無礼 切っ み 少なくとも落車に優ること万々なりとい 7 ならず、 ŧ 車 ならず捕虜の分際として推参な所作と思わ なくも一人は伯爵の若殿様で、 のうちいずれへか衝突の尻をもって行かねばならん、 を維持すれ 何ぞそれ引き合に出るの 6 来の憲法 見えすいたような衝 かかる塗炭に右の方より不都合なるし ば退 。 の 避け て落車にしろ、 何 間 **》** まだ調 とも云わず傲然として我前 ただ前 か か落 ば な事は平民たる我々風情のすまじき事 である、 ij おけ ば衝 ならぬ、 わざる今日の時勢なれ のところに 車 へ出られるばかりと思い るそれなお この時事に の二あるのみと、 突するばかりだろう、 と 両 さるによってこの尨 突になるといつでも と云って左右へよけようとする 礼ならんと欲すれば孝なら できさえすれば退却 ったと思 退 はなはだし の 間 屈そうに立って 臨 刺身のツマ に堂と落 6 でかつて狼狽したる を通ったの 一人は吾が恩師であ いたまえ、 ば、 ちょっとの き| 余の たまえ、 えども エ お なる荷 御 I おやじの るべ 免蒙 さ、 すな この 仕 ŧ 主 の荷 い けるがご 対が・ 満点ざら 一義 間 ツ ŧ に 相 であ 車と そ とし . 車が 悲 今ま わ 遺 の 夫 で ち か の

が声を揚げてアハ

ア

ハ

アハ

と三度笑った。

そ

の

で

け

ば

匹

ツ角を曲

る時には

ル

を

を考究する暇 ペンスを得た る依托笑なり、 笑い方苦笑にあらず、 カラカラ笑に か、 が あらず、 なかっ この依托笑をするためにこの巡査 ワン・ た 全くの 冷笑にあらず、 シ IJ 作り笑 グを得 な り、 微笑に た か 人 遺ゥ 憾ผ から あらず、 は ながらこれ シックス ま ħ カ てす

ころだと思

いたまえ、

余の車は

両君の間

に介在

して操縦

す

で

らなけ らやは がけ て覚束なき余に先 ころがこ 容易にそっち の 内は何とかかんとかごまかし て う方へは行 内には詳しい という価 の い つ って馳け 進む、 向 角 と口に でな か との思でハンドルをギュー しまう、 けて なき功名を博し得たと云う御話! 度を一どきに ij がり落ちた、 ħ ツマ巡査 ば解釈 畄 の不意撃に 余に尾行 つ 値 は云ったようなも すぐさま馳 さて両君は す、 ここに かないで曲 ŧ 今度は違った方へ行こうとの御意 だがこ が自転車には毫 な の方角 これが巡公でなくっ がつかな |などが笑ったってとす いから、 導 . 廻 お の って 後で聞 て来た 急 へ曲らない、 い たるべしとの厳 この辺の地理不案内 け て 劇 り角へくるとただ曲りやすい方へ曲 出され いて車をか しまった、 か な すぐ話 一人の 同 る の から質問 ·ッと 提問 てい o, 方 じ も詳しくないから、 る 向 Ĺ 所へ何返も出て来る、 か たが、 サイ う し どう わす暇もなくもろく 転 道幅三分の二も来た頃 ままになら ったら、 換 そ 命を伝えた、 て先日 は、)まう、 クリスト の判別が な だ ぐさま御 の そうは持 な い か 明 日 方 廻 IJ の の御 であ と の が 問 娘さん 余と は浮世 い が の 転 苘 の 題 ち切 前 る、 あ た 車 い 君 行こうと思 し 口実を は 同 ま 講 め は かるに とし の た、 いで気が 始め ざとな だっ ŧ 九 ħ 後 よろし の こもっ るも て先 なか を慕 度 の 案 σ

-5-

ある、 やベル 逆鱗の体で、チンチンチャイナマンと余を罵った、罵られたはこれほどまで発達しておらんと見えて、彼の落ち人犬に る余は一矢酬ゆるはずであるが、そこは大悠なる豪傑の本性 鳴すか片手をあげるか一通りの挨拶をするのが礼だそうだが、 余を豪傑だなどと買被って失敬な挙動あるにおいては七生ま 違らるるを恐れて、 曲って行く、 をあらわして、御気の毒だねの一言を遺してふり向もせずに のもまた無理のないところである、 たもので、 ンマリ転換を遂行するのも余にとっては万やむをえざるに出 はこの際少しもなきにおいてをやだ、ここにおいてかこの 落天の奇想を好む余はさような月並主義を採らない、 である、 であるから不思議はない、当然の事であるが、 正直なる余は苟且にも豪傑など云う、一種の曲者と間 を鳴したり手を挙げたり、 御気の毒だね」よりほかの語が出て来なかったの 余のあとにくっついて来た男が吃驚して落車 実はふり向こうとするうちに車が通り過ぎた ここにゆっくり弁解しておくなり、 そんな面倒な事をする余裕 双方共無理のないところ 西洋人の論理 い 万一 した ダ

ちらを向いて休んでいる、 この四通八達の中央へと乗り出す、 今しも余の自転車は「ラヴェンダー」坂を無難に通り抜けて、 今日はズーズーしく構えて、バタシー公園へと急ぐ、 うと人を落す事もある、 な通りで、 すこぶる閑静だが、その手前三丁ばかりのところが非常の 忘月忘日 初学者たる余にとっては難透難徹の難関である、 人間万事漱石の自転車で、自分が落ちるかと思 そんなに落胆したものでもない その右側に非常に大なる荷車が向 向うに鉄道馬車が一台こ 常 の 雑 変 園 番 さ る と う は

で祟るかも

知れない、

で の

紳士、 馬車馬 驚ろいて吾輩の自転車を蹴飛す、 ら退却にしようか落車にしようかなどの分別 車との間に這入りかけた時、 間をすり抜けるべく車を走らしたのである、 うむきに休んでいる、その間約四尺ばかり、余はこの四尺の しらん英国は険呑な所だと の時派出やかなるギグに乗って後ろから馳け来りたる一 ですうと抜けて行く、間の抜さ加減は尋常一様にあらず、 やれうれしやと思う間もなく鉄道馬車は前進し始める たか馬の太腹を叩いて、 輩にも出なかったと見えて、おやと思ったら身体はもう落ち まえ、殺しやしないのだからと、余心中ひそかに驚いて云う、 ておった、落方が少々まずかったので、 から割り込んで来た、 して見ると時には自転車に乗せて殺してしまうのがあるの 策を揚げざまに余が方を顧い の前足と並んだ時、 かようなとっさの際には命が大事だか からくも四這の不体裁を免がれた、 すなわち余の身体が鉄道馬車と荷 一台の自転車が疾風のごとく向 みて曰く大丈夫だ安心した 相手の自転 落る時左の手でした 車は は、 余が車 さすがの吾 何 喰わ 。 の 前 個の 馬は ゕ

* * *

その苦戦云うばかりなし、しかしてついに物にならざるなり、 向脛を擦りむき、 にして、 大落五度小落はその数を知らず、 元来この二十貫目の婆さんはむやみに人を馬鹿にする婆さん 余が廿貫目の婆さんに降参して自転車責に遇ってより以来、 この婆さんが皮肉に人を馬鹿にする時、 或る時は立木に突き当って生爪を剥がす、 或時は石垣にぶつかって その妹の十

降参は我に益なくして彼に損ありしものと思惟す、無残なる間を浪費して下宿の飯を二人前食いしに過ぎず、さればこのまた。では、はますます深くなり、余が継子根性は日に日に増定し、ついには明け放しの門戸を閉鎖して我黄色な顔をいよし、ついには明け放しの門戸を閉鎖して我黄色な顔をいよいよ黄色にするのやむをえざるに至れり、彼二婆さんは余が時色の深浅を測って彼ら一日のプログラムを定める、余は実に彼らにとって黄色な活動晴雨計であった、たまたマ降参をに彼らにとって黄色な活動晴雨計であった、たまたマ降参をに彼らにとって黄色な活動晴雨計であった、たまたマ降参をに彼らにとって黄色な活動晴雨計であった、たまたマ降参をはりにとって黄色な活動晴雨計であった。大きな音をいよりには、瞬きもせず余が黄色な面を打守りていかー貫目の婆さんは、「瞬きもせず余が黄色な面を打守りていかー貫目の婆さんは、「瞬きもせず余が黄色な面を打守りていか